

すが  
菅

きくこ  
基久子

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第39号
学位授与年月日	平成8年9月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 国文学国語学日本思想史学専攻
学位論文題目	心敬の思想史的研究
論文審査委員	(主査) 教授 玉懸博之 教授 仁平道明 助教授 佐藤弘夫

## 論文内容の要旨

### はじめに

本博士論文は二篇から成る。第一篇は、二系統の諸本が存する心敬の主著『さゝめごと』についての、いわば書誌学的考察である。第二篇は、心敬の仏教思想についての考察である。本論文の目次は次の通りである。

### 目次

#### 序論

- 一 類従本系『さゝめごと』と版本系『さゝめごと』
- 二 本論の趣旨

#### 本論

第一篇 二系統の『さゝめごと』の思想的差異

##### 序

#### 第一章 理想の歌人像の相違

第一節 「えんなる歌人(歌仙)」をめぐって

- 1 版本系「えんなる歌人」の具体像
- 2 類従本系「えんなる歌仙」の具体像
- 3 二系統の『さゝめごと』における理想の歌人像の齟齬

## 第二節 西行像における相違

- 1 「閑人」について
- 2 版本系『さゝめごと』の西行像
- 3 心敬における遁世
- 4 類従本系『さゝめごと』の西行像
- 5 心敬の遁世観
- 6 小括

## 第二章 『沙石集』と『さゝめごと』の思想的影響関係

はじめに

### 第一節 和歌陀羅尼説をめぐって

- 1 接点としての和歌陀羅尼説
- 2 『沙石集』の和歌陀羅尼説
- 3 『さゝめごと』の和歌陀羅尼説

### 第二節 達磨説話挿入の意味

- 1 達磨説話挿入の意義——『沙石集』の場合
- 2 達磨和歌説話の受容状況と達磨説話挿入の意義——『さゝめごと』の場合

## 第三章 思想的位置づけ

### 第一節 『さゝめごと』の構成について

- 1 「分別」の用例
- 2 修行の階梯

結論

### 第二節 二系統の『さゝめごと』の成立について

- 1 木藤才蔵氏の説
- 2 湯浅清氏の説
- 3 金子金治郎氏の説
- 4 小括と展望

### 第三節 『さゝめごと』の思想史的意味

- 1 類従本系『さゝめごと』の思想史的意義
- 2 版本系『さゝめごと』の思想史的意義
- 3 二つの『さゝめごと』の思想史的な位置づけ——むすびにかえて

## 第二篇 心敬の仏教思想

序 教学の受容状況に関する問題の所在

### 第一章 心敬の本覚論——連歌・連歌論と本覚思想との関連に着目して——

はじめに

- 第一節 本覚の語とその解釈
- 第二節 「一心の覚知」をめぐって
- 第三節 空仮中三諦をめぐって

おわりに

## 第二章 心敬の十識説とその源流

はじめに

- 第一節 心敬の十識説の概要
- 第二節 転回説の受容

おわりに

## 第三章 修行論の基調——天台禅法の解釈——

はじめに

- 第一節 天台禅法の解釈について
- 第二節 天台止観と臨済禅
- 第三節 心敬の修行論の立場

まとめと展望

## 第四章 菩提道の実践

### 第一節 色世界と「眼」

はじめに

- 1 視覚的傾向と視覚に対する意識
- 2 眼の重視
- 3 色世界と眼

おわりに

### 第二節 無常観と無常詠

はじめに

- 1 無常述懐の尊重
- 2 花の句における無常
- 3 鐘の音における無常
- 4 無常観と無常詠
- 5 おわりに

### 第三節 心敬における「空」と「無常」

はじめに

- 1 「空」の理
- 2 空の悟り
- 3 無常の自覚と歌詠

おわりに

## 第五章 「えん」とその表象

- 第一節 「えん」と道徳性および宗教性
- 第二節 『さゝめごと』における「えん」

- 1 言動に対する評価として用いられている「えん」
- 2 歌句自体の評価を言い表している「えん」
- 3 心の状態またはその反映を言い表している「えん」
- 4 歌道のありようを言い示した「えん」およびその他の「えん」
- 5 まとめ

### 第三節 月と氷のシンボリズム

はじめに

- 1 水のイメージと水の「えん」
- 2 月の「えん」
- 3 氷の「えん」

おわりに

以上である。

次に、第一篇および第二篇における問題の所在と考察の結果について述べる。

#### 一 第一篇における問題の所在と考察の結果

心敬の歌論（連歌論）は主著の『さゝめごと』にほぼ示されていると言ってよい。ところが、ひとくちに『さゝめごと』と言っても大きく二系統が存し、章段や構成のうえでかなりの異同があって、どの『さゝめごと』をテキストとして心敬の歌論や思想、美意識を探り出していくかによって、結果に大きな差異が生じる可能性が高い。つまり、『さゝめごと』研究そして心敬研究は、テキストの選択という大きな問題を抱えているのである。

『さゝめごと』の諸本は、章段の構成や内容・語句の異同等の点から、大きく二つの系統に分かれ、従来、「版本系」と「類従本系」と呼ばれている。この呼称は、二系統のえーうちの一方が、元禄3年の版本と同系統であり、もう一方が群書類従本と同系統であることによる。版本系『さゝめごと』の諸本の異同、および類従本系『さゝめごと』の諸本の異同については、湯浅清氏の『心敬の研究』（1977 風間書房）・『心敬の研究 校文篇』（1986 風間書房）に明らかにされている通りである。一見してわかるように二系統の『さゝめごと』それぞれにおいて異同がはげしいことはもちろんであるが、類従本系『さゝめごと』と版本系『さゝめごと』とでは、語句や文章だけでなく段落構成の上でもかなりの相違が認められ、校合が不可能なほどである。

これらの諸本をめぐる、ある議論がされてきた。というより、そもそもある説が出されたのが、1952年である。すなわち、木藤才蔵氏が、二系統の『さゝめごと』のうちの版本系を心敬の草案本、類従本系を同じく心敬の改編本であると位置づけた<sup>1)</sup>。この説は、かなりの評価を受け、多くの研究がこの説の上に展開された。

この説に対し、反論を加えたのが、湯浅清氏である。湯浅氏は、1956年に、木藤氏が改編本とみなした類従本系こそが心敬の手にかかるもので、木藤氏が草案本とした版本系は、そもそも他者の手による改編本であるとの見解を提出した。しかし、湯浅氏の反論は学界に受け入れられず、草案本系とされる版本系の尊経閣文庫本を底本にして同じ系統の天理図書館本等で校合を加えた『さゝめごと』が、木藤才蔵氏の校注で、岩波の日本古典文学大系に収められて世に出るに及んで、版本

系の『さゝめごと』が心敬研究のテキストとして一般視されるようになる。こうした学界の趨勢のなかで、湯浅氏は学説的には孤立してきたと言ってよい。

両者の成立に異なる人物が関与していること、さらに言えば版本系『さゝめごと』は心敬以外の人物の改編したものであると考えられることについては、早い時期から湯浅清氏が問題にされている<sup>[2]</sup>。湯浅氏は版本系『さゝめごと』は問いと答えとが内容的に呼応しない部分が随所に見られること、版本系編者の歌観と類従本系編者のそれとが異なること、等の点を根拠として、類従本は心敬の著述を写したものの、版本は宗祇の改編になるものという見解を提出しておられる。湯浅氏は現存する書本の奥書から成立年次を推定し、それぞれの『さゝめごと』について、その成立に関与した人物を割り出された。そして、イ 「幽玄」について関心をもっているが、「幽遠」とは区別しない、ロ 「自讃歌」を推賞するけれども、新古今周辺の作を最高不可説とは見ない、ハ 口伝秘事を尊び、古今集序の六義について口伝を受けている、ニ 心敬から書状による歌、連歌の指導を受けている、等、版本系『さゝめごと』に見られる歌論の特徴を挙げて、それらの特徴を備えうる人物を、さきに割り出した人物と合わせて検討を加え、宗祇という具体的な人物を導き出されたのであった。しかしながら湯浅氏の見方は学界に支持されず、版本系が心敬の草案本であり、類従本系が心敬（もしくは心敬以外の人物）の改編本であるという説が専ら広く受容されて、ほぼ通説となり現在に至っている<sup>[3]</sup>。

しかし、類従本系『さゝめごと』と版本系『さゝめごと』を比べてみると、語句の使用状況に関して少なからぬ相違が見られ、これらの相違を詳細に分析し検討を加えていくと、かなりの程度の思想的な齟齬に直面せざるを得ないと思われるのである。

このような現状から、類従本系『さゝめごと』と版本系『さゝめごと』との内容的な違い、特に思想的な相違を明らかにする必要を強く感じる。そもそも版本系と類従本系とは仏教語の使用状況に差異が認められ、同一人物の執筆ないし改編とは考えにくい。本末二巻全体の構成も異なっており、当然ながら、構成の意図も異なるものと考えられるのである。このように見てくると、類従本系『さゝめごと』と版本系『さゝめごと』の相違を徹底的に明らかにした上でなければ、テキストの選択も不可能なのではないかと考えざるを得ない。

このような状況を鑑み、従来ほとんど等閑視されてきた類従本系『さゝめごと』に目を向け、類従本系と版本系の思想的な相違点を明らかにしなければならぬと考えた。

かつて鈴木久氏は版本系『さゝめごと』に詳細な分析を加え、『さゝめごと』本末各巻は天台の教義に拠って、それぞれ教門と観門とに准えて執筆されているとの、傾聴すべき指摘を提出された<sup>[4]</sup>。鈴木氏の指摘の通り、版本系『さゝめごと』の編者はおそらく、教観二門兼備をよしとする観点から全体の構成を企画したのであろう。まず教門に相当する部分を執筆して、次いで観門に相当する部分を執筆して全篇を完成させようとの意図が在ったと理解される（ただし鈴木氏は版本系『さゝめごと』の構成を心敬自身の発案になるものと考えておられるようである）。ところが、もう一方の類従本系『さゝめごと』には、教観二門に准えて構成を配置する手法は見られない。むしろ全編を通じて随所に観門に相当する仏教思想が認められるのである。このような両者の立場の違いを、はたして同一人物における思想的な転換として説明しうるものであろうか。

しかも、版本系の場合には『沙石集』との連関関係がかなりの可能性をもって指摘でき、おそらく『沙石集』の影響の下に上下巻の構成が考慮・決定されているとみられる。これは類従本系の場合

合にはあてはまらない。とすれば二系統の『さゝめごと』を因果という連続する線上において論ずる必要はないのではないか。

もし両者の相違が、同一人物の思想的転換の所産であるなら、変革や深化が相応の方向や度合をもって看取されるだろうし、その場合には因果関係もきわめて連続するかたちで見えてくるだろう。少なくとも、そうした変革や深化の方向の思想的必然性の片鱗はうかがえるのではないか。そしてもし両者の相違が異なる人物の関与によるものであるなら、両者の間には思想的な齟齬ないし非連続が、その大小はともかくとして確固として存在していよう。

以上のことから、第一篇においては、版本系『さゝめごと』と類従本系『さゝめごと』における使用語句の相違や同一語句の使用状況の相違等を丹念に比較分析することから始めて、両者の思想的相違を探ろうとした。

まず、第一章においては、理想の歌人像の相違を明らかにした。第一節では「えん」であるとされる歌人（もしくは歌仙）の具体像が異なることに注目、版本系『さゝめごと』の具体像が西行と長明を代表とする遁世者であり、時に「非人」と呼ばれること、また類従本系『さゝめごと』の具体像が西行と慈円を代表する仏者であり、悟りの境地に到達している人物と考えられていることを導き出した。第二節ではこれをふまえつつ、特に西行について、版本系『さゝめごと』と類従本系『さゝめごと』とでは異なるイメージを掲げていること、少なくとも読者は異なる西行像を結ぶであろうことを論証しようとした。

第二章においては、版本系『さゝめごと』には一様に認められる『沙石集』の影響に注視し、和歌陀羅尼説と達磨説話をめぐって、二系統の『さゝめごと』と『沙石集』の思想の比較を行った。これにより、類従本系のかたちから、版本系のかたちへと改編された際に、『沙石集』が参看された可能性が高いことを指摘できたと思う。

さらに、第三章においては、二系統の『さゝめごと』の思想史的位置づけを試みた。第一節では『さゝめごと』本末の構成について検討し、二系統の『さゝめごと』の全体の構想が各々どのような思想の下になされているのかについて考察した。結果として、類従本系『さゝめごと』は、天台宗の止観行のうちの次第行にならって和歌・連歌の修行を考え、修行の階梯に沿って本末両巻を構成したものと考えられる。つまり、修行方法としては次第禅観を受容し、天台の別教・円教および密教を念頭において、密教の到達点を目指して構想・執筆されたものと見ることができる。このような類従本系『さゝめごと』の構成およびそれを支えている思想は、版本系『さゝめごと』の教観一致を目指す構成およびそれを支えている思想とは全く異なるものである。また、類従本系『さゝめごと』が天台宗の密教を頂点とした教相判釈に沿って一貫した構成を持っていることから、類従本系の方が版本系よりも著作として整っていないという従来の指摘は退けられるであろう。第二節では類従本系『さゝめごと』と版本系『さゝめごと』の成立について、研究史をふまえつつ私見を述べるとともに、両系統の『さゝめごと』の思想史的意義を明らかにした。

これらの考察によって、禅宗尊重の傾向を後半の所々に持つ版本系『さゝめごと』と天台教学に則った構成や思想を一貫して持つ類従本系『さゝめごと』の二つの思想的立場が明らかになった。二系統の『さゝめごと』が思想的にいかにも違うものであるかということとはもはや明確だと思う。このような両者の思想的な違いは、従来学界ではほぼ承認されてきた、執筆と改編が同一人物によって行われた可能性を否定するものであると思われる。そこでどちらが心敬の立場に近いと言えば類

従本系であるのは言うまでもない。よって、私は版本系が心敬以外の禅宗の影響を受けた人物による改編の結果生じたものであり、類従本系を心敬の『さゝめごと』を伝えるものとする。

#### <註>

【1】木藤才蔵氏は、天理図書館本『さゝめごと』(版本系)と群書類従本系『さゝめごと』とを比較検討され、天理本の諸段を整理して類従本が成立したとみなして、前者を草案本、後者を整理本と関係づけておられる(『校註さゝめごと 研究と解説』1952、『さゝめごとの研究』1990 臨川書店 所収)。さらに、類従本の整理者が心敬ではない可能性を示唆しつつ、「類従本の整理の仕方が十分でなく、作品として渾然としたものになっていない点で、草案本の面目を改めた優秀な証本とみなすことはできない」としておられる(前掲書)。この点について金子金治郎氏は、木藤説が版本系を心敬の草案本、類従本系を同じく心敬の改編本とみなしているとしながら、これをほぼ全面的に支持し「上下全巻を見渡した論の組成を比較しても、奥書の語るところを注視しても、木藤説が妥当であり、従うべき」と記しておられる(『連歌論の研究』第三章第四節「心敬の風雅意識」1984 桜楓社)。

【2】湯浅清『心敬の研究』(1977 風間書房) 第一篇第一章第一節「さゝめごとの成立事情」および第四節「版本系『さゝめごと』の編者」

【3】金子前掲書は、この湯浅説に言及した上で、「今日承認されているのは木藤説であって、湯浅説はまだ支持されていない」と述べ、木藤説を妥当であるとしている。

【4】鈴木久「さゝめごと密勘」Ⅶ(『福島大学教育学部論集』19-2 1967)

## 二 第二篇における問題の所在と考察の結果

第二篇の課題は、心敬の仏教思想を明らかにすることである。彼が天台系の僧侶であり、天台教学を学んだと考えられることは、既に衆目の一致するところである。が、仏教思想の受容状況に関しては、版本系『さゝめごと』をテキストとした研究にとどまっており、結果としては心敬の思想を総体的に把握するに至っていない。よって、本論においては、主として類従本系『さゝめごと』における仏教思想の受容状況を照射して、類従本系『さゝめごと』の思想的な特徴を明らかにし、その仏教思想上の立場を明らかにすることを主たる目的とする。

心敬の連歌論や和歌・連歌の実作に観取される仏教思想の影響については、先行歌人との比較や仏教教義の適用の検討等を通じて多方面からの考察が加えられてきている。中でも注目されるのは、まず、現象と現象のうち存在している無常・畢竟空の実理に対する心敬の深い洞察に注目して、仏教的無常観の反映を作品のうち認め、これを評価する立場であろう<sup>[1]</sup>。次には、主として連歌論の思想的基盤を仏教の教理教相に基づいて明らかにしていこうとする立場があげられよう。後者の中には、心敬の思想的立場を専ら禅的なものと見做す見方もある<sup>[2]</sup>。が、その中心になっているのは天台仏教に沿って心敬の人と作品を捉え理解して行こうとする方向であると言ってよいだろう<sup>[3]</sup>。心敬の観心を基調とする修行論をめぐっては、そこに栄西以来の臨済禅の影響を認めるか否かの違いを有しながらも、天台止観がその基盤であるという点ではほぼ一致した見解が得られてきている<sup>[4]</sup>。或いはまた鎌倉・室町期の日本天台において開展され、隆盛を見た天台本覚思想に着目して、その影響を心敬にも積極的に認め、天台本覚思想の表出として心敬の連歌論著『さゝ

めごと』を評価する動きもある<sup>15)</sup>。

心敬が横川で学んだ天台僧であったことは、現在ではほぼ承認されている<sup>16)</sup>。また主著『さゝめごと』には「天台禅法」(=天台止観)こそが最高の仏行であると表明されている。従って心敬の連歌論の思想的基盤を、主として天台仏教に求めることは肯げよう。ではその受容状況はどうだったのであろうか。『さゝめごと』における仏教書の引用に関しては、木藤才蔵・鈴木久の両氏によって、その典拠が概ね明らかにされた感がある。が、心敬が天台僧ではあるとして、それではどのような思想系脈に属するかという問題については、残念ながらまだ模索が続けられている状態であると言わねばなるまい。思想的な側面を念頭に置いた心敬研究が遅滞を強いられている現状の背景には、心敬の著述の現存するものが連歌論や和歌・連歌の実作の類に限られていること、心敬の受法の師が誰であったかというような、仏法における実際の授受関係が一切不明であること、及び心敬の所属していた十住心院の史料が、恐らくは応仁の乱の際に焼失したものと考えられ、わずかに五通の安堵状を残す他には現存しない(少なくとも現在は発見されていない)こと等の諸事情があろう。従って例えば『さゝめごと』がどのように、またどの程度に仏教と文芸を融合ししているか、という仏道と歌道の連関関係を考えるに際しても、いったい当時のどのような思想・仏教理解に対する受容があり、具体的にどの部分をどう適用しているのかを究明しようとすれば、心敬の仏教語の使用状況から、彼の仏教理解の程度や仏教思想の受容の仕方を辿って行くしかない。このような方面に早くから着手し、仏典との比較対照のうちに『さゝめごと』の具体的な思想的根拠の究明を企図されたのが鈴木久氏である。鈴木氏はその労作「さゝめごと密勘」の中で、天台教学の受容を念頭に置きつつ仏教語の用例の類似を辿り、智顛-最澄-源信-栄西-円爾弁円-無住一円-心敬という思想系脈を提示された<sup>17)</sup>。また田村芳朗氏は天台本覚思想の影響を円爾弁円<無住一円  
清嚴正徹>心敬-宗祇という流れのうちに捉えられたが<sup>18)</sup>、これも「本覚思想」の語の使用状況から思想的影響関係を推検したものであり、方法的には同じであると言えよう。ただ、これらの場合、主眼は、使用(引用)仏教語の類例の検索と、それに基づく受容された経文・教説の限定にあった。思想的傾向の判断も、専らそれに依拠してなされている。ためにその経文・経説の解釈や理解の異同については、特に問題とされてこなかったようである。

心敬の連歌論は、歌論・連歌論史研究上も大いに重視されてきたが、その大きな理由は、仏教思想に根ざした歌道仏道一如観・和歌連歌不二観にあると言ってよいだろう。歌道と仏道の相関は、心敬以前の歌人にも見られ、心敬に端を発するものではない。例えば和歌を仏教の陀羅尼と見なす和歌陀羅尼観や、歌道を仏道の助縁と考える歌道方便論は、心敬よりも時代を逆上った所にその淵源を見ることができる。しかしながら、判詞を含む数多くの歌論・連歌論の中でも、心敬ほど徹底して歌道と仏道を不可分視し、歌道における精神性・宗教性の重要であることを説いてやまなかった人物はなかったと言ってよい。

このような心敬の連歌論の特徴に眼を向けるとき、その思想の根幹をなしている世界観や人生観がどのような立場をとっているものなのか、とりわけ人間としていかに在るべきかという人間存在そのものに対する問いかけがどのようになされているのか、等々のことならについて深く問う必要を感じる。なぜ頑ななまでに歌道と仏道の両方を重視するのか。それは彼以前の歌人の歌論における仏道の尊重の踏襲あるいは受容に過ぎないのか。それとも全く独自の仏教思想の導入なのか。そもそも、どのような仏教思想がどのように受容されているのか。こうした問いに対して、明快な解



答はまだないも同然である。従来の心敬研究のうち、彼の思想的側面に関する研究（それ自体が決して多くはないが）のほとんどが版本系『さゝめごと』に依拠して行われてきた経緯を見るならば、心敬の思想的側面に関する研究は、まさにこれから始まると言ってよいだろう。

以上のことをふまえつつ、本篇においては、心敬の連歌論および作品に現れている彼の見解および思想の断片を通して、そこに受容されていると見られる仏教思想の内容とその受容状況を明らかにしようとした。そしてそれにより、彼の仏者そして歌人としての立場や観点を明らかにするとともに、彼が歌道と仏道をどのように融合しているのかを追求した。具体的には次の通りである。

第一章においては心敬の本覚論を考察した。作品中に見える「本覚」の語に注目し、心敬の本覚論が天台本覚思想史の中でどの位置に最も近いのかを明らかにした。心敬は鎌倉・室町期に開展し、その活躍当時に天台の主流であったとされる天台本覚思想の本覚理解ではなく、むしろそれ以前の、例えば最澄に見られるような本覚理解に立っている。そしてそれに基づきながら妄動心から不動の真心への転回を捉え、その過程において観心修行が不可欠であることを説くのである。心敬の連歌論がすぐれて精神的向上を説きうるのも、そのように心敬が、天台本覚思想が主張した絶対的な相即論に基づく現実肯定の思想を持っておらず、むしろそれとは対立する真実理解の立場をとっていたからであろう。

第二章においては十識説を考察した。心敬の十識説を分析すると同時に、その源流と考えられる五大院安然の思想に注目した。この十識説においても転回説の受容が見られ、前章の考察において明らかになったところと一致した。以上の両章において、心敬の仏教思想の立場がかなり明らかになったと思う。

第三章においては「天台禅法」の語釈を中心に修行論の基調を探った。これにより、従来版本系『さゝめごと』をテキストとしてきたために生じたと思われる、心敬への臨済禅の影響を否定できたと思う。

第四章においては仏道と歌道の相関を理論と実践の両面にわたって考察した。第一節では視覚的なものに着目し、心敬の著作における「眼」の尊重と見ることの意義を探った。心敬にとっては、色相すなわち眼前に連綿と広がる色彩世界は、無限の宗教的対峙の対象であり、仏教的な心の清浄がその対峙の原点として常に望まれていたと言える。次いで第二節では無常観と無常詠の尊重について考察した。その結果、無常観に立った無常詠が菩提の行すなわち菩提道と考えられていることがわかった。第三節ではこれをふまえつつ、「空」と「無常」の両概念が心敬においてはどう関わり合っているのかを探った。これはこれまでに複数の研究者から、「空の理念」あるいは「空の悟り」が心敬の文芸の思想的基盤であると言われてきたことを念頭に置いている。考察の結果、天台宗の教相をふまえ『法華経』『涅槃経』『華嚴経』を『般若経』に優先する立場を明らかに示す類従本系『さゝめごと』と専ら空門を尊重する記述を持つ版本系『さゝめごと』とでは仏者としての思想的立場が異なることを指摘できた。とすれば、心敬の連歌および連歌論が体系的な天台教学の存在なくしてはありえぬものであったことは疑いない。

第五章においては、中心理念である「えん」を取り上げ、これが実は宗教的価値と文学的価値を同時に担う概念であることを論証するとともに、その表象であるいくつかの景物に目を向け、その属性を分析・考察した。心敬は月・水・氷を同質のものとして捉えているが、その根拠はそれらの属性が清浄であることにつける。そうであればこそ心のありようの喩えとされるのである。結局、心敬

の連歌と連歌論の根本は心の清浄にこそ在るのだ。そして心の清浄が、仏教思想を拠り所としつつ、美的理念として確信されているところに、心敬の「えん」の特徴があると言ってよいであろう。

<註>

【1】例えば梅澤伊勢三「心敬における歌道と仏道」(『文芸研究』10 1957)、石津純道「心敬(再論)」(『中世の文学と芸道』1961 至文堂 所収)等。

【2】北山正迪「心敬僧都の歌・連歌論と時代思潮としての禅——禅の芸術性的問題」(『禅文化』35 1965)

【3】教学受容の側面について検討を加えたものとしては、特に鈴木久「さゝめごとと密勘」Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ(『福島大学学芸学部論集』14-2・15-2・17-2 1963~5)、同Ⅵ・Ⅶ(『福島大学教育学部論集』18-2・19-2 1966~7)が非常に詳細な考証を行っており、後学に与えている影響も大きいと言えよう。

【4】鈴木久「さゝめごとと密勘」Ⅴは心敬の観心主義の立場を臨済禅を融合した天台止観であるとす。

【5】鈴木久「さゝめごとと密勘」Ⅴ、田村芳朗「天台本覚思想概説」(『天台本覚論』岩波日本思想大系9 所収)

【6】金子金治郎『心敬の生活と作品』(1982 桜楓社)の功績による所が大きい。

【7】「さゝめごとと密勘」Ⅴ

【8】田村前掲論文

## 論文審査結果の要旨

本論文は心敬の名著『さゝめごと』についての書誌学的・思想的考察を主とする第一篇と、心敬の仏教思想を考察した第二篇からなる。

第一篇では三つの章を設け、「版本系」「類従本系」と呼ばれる『さゝめごと』の二つの系統のテキストについて、使用語句の相違や同一語句の使用状況の相違等を詳細に比較検討することによって、両者の思想上の相違を明らかにしようとする。その考察をふまえ、版本系を心敬の草案本、類従本をその改編本と位置づけてきた従来の有力学説に対し、類従本系が心敬の手になるものであり、版本系が他者による改編本であることを、独自の視角から論じている。

まず、第一章では、論者は、二系統のテキストにおいて理想とされる歌人像が異なっていることを両者の西行像の分析などを通して明らかにしようとする。第二章においては、版本系に顕著にみられる『沙石集』の影響に着目し、和歌陀羅尼節と達磨説話をめぐって二系統の『さゝめごと』と『沙石集』の比較を行い、類従本系から版本系のかたちへと改編された際に、『沙石集』が参照された可能性が高いことを指摘する。第三章では、二系統の『さゝめごと』の思想内容を比較している。類従本系が天台教学に則った構想や思想を一貫して持っているのに対し、版本系ではその後半に禅宗の影響がみられるとし、両者が同一人物によって執筆・改編されたとする従来の有力説を批判する。

五章からなる第二篇では、第一篇での考証をふまえ、心敬の仏教思想を解明することを旨としている。従来、心敬の仏教受容問題は主として版本系『さゝめごと』をテキストとして研究が進められてきた。それに対し、論者は版本系『さゝめごと』が心敬以外の人物の手になる改編本であるという前篇での結論をもとに、類従本系テキストを主たる素材として心敬の仏教思想受容を考えようとする。

まず第一章では、心敬の本覚論をとりあげ、心敬の思想が天台本覚論の展開の中でどのような位置を占めるものであるかを考察し、それが心敬と同時代の本覚論の主流とは異なり、中世以前の最澄や安然の如き本覚理解に立脚していると言及。これまでも心敬への天台思想の影響は指摘されてきたが、天台思想のうちでも心敬がどのような流れを汲んでいるかを具体的に論じた点において、本論文のもつ意義は大きい。第二章においては、心敬の十識説に着目し、それが安然の思想を承けるものであることを指摘し、心敬の思想が中世以前の天台思想に連なるという前章の結論を補強する説を提示している。第三章では、心敬における「天台禅法」の語句の解釈を中心に、その修行論について検討している。類従本系『さゝめごと』にみえる「天台禅法」という語句は、これまでの有力な学説においては「天台と禅法」と捉えられ、これもとに心敬と禅との関係が説かれてきたが、論者はこれを「天台の禅法」とみるべきことを論証し、心敬にみられるとされてきた臨済禅の影響を否定する。研究史上重要な指摘である。第四章では、前章まで考察してきた心敬の仏教思想がその歌道の理論と実践にどのような影響を及ぼしているかを、具体的に考察し、数寄と仏道を一体視する心敬の連歌及び連歌論が、体系的な天台教学の摂取の上になりたつものであるとする。第五章では心敬の連歌論の中心理念である「えん」を取りあげ、それが宗教的価値と文学的・美的価値を同時に担う概念であることを論ずるとともに、心敬の連歌と連歌論の根本は心の清浄にこそあると結論づけている。

以上の第一、二篇の考証によって、心敬の主著『さゝめごと』の二系統のテキストにおける思想上の相違点を明らかにした上、それをふまえて心敬の仏教思想受容の実態を解明するという所期の目的はほぼ達成されたものと判断される。二系統のテキストについての、書誌学的・思想史的考察は綿密かつ周到であり、読みごたえのある内容となっている。また古代以来の仏教思想の大きな流れの中に心敬を位置づけようとする視角とその成果も斬新かつ説得的であり、論者の力量を感じさせる。一部論証に粗さのみられる部分もあるが、論文全体の価値を損なうものではない。本論文が、心敬の思想の研究ならびに中世思想史研究に寄与するところ大であることは疑えない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。